



五月晴れの日に想うこと

文挿絵・本山和寿(学校教育学部学生)
Motoyama, Kazutoshi

「憐憫を垂れる」という使い方はできるのでしょうか。

母方の祖父と、初めてまともに言葉が交わしたのは、私のこのような唐突な質問がきっかけだったと記憶しています。

当時の私はかなり人見知りをするほうで、たとえるなら内気なサボテン、といったところでしょうか。しかも祖父は祖父で、道すがらのお地藏さんのように寡黙な人です。

想像してみてください。サボテンとお地藏さんです。二人の会話はすぐに途切れてしまい、秋の罫雲のようです。どれだけ季節が移り変わろうとも、入道雲のように膨らんでいく会話は期待できません。ただそれでも、サボテンはお地藏さんとの会話には満足していたのですが。

祖父は実直な人でした。母とは義理の関係でしたが、早くに両親と弟を亡くした母にとっては、代えがたい存在だったようです。そして私にとっては、追い続けるべき目標の人物です。しかし、そのように思うようになったのは大学に入ってからで、それまでは先のお地藏さんのような存在でしかありませんでした。

時折両親に連れられて祖父のもとを訪れると、祖父はよく分厚い本を読んでいた。母に聞くと、法律に関する本だとのこと。母は続けて、祖父は若い頃に貧困のため弁護士を諦めなければならなかったこと、小学校の校長を退職したあとにまたその情熱は衰えていないこと、などを教えてくれました。大学生となった今聞けば、祖父の生き方に熱いものを感じるのですが、当時の私はひたむきな祖父に対し、無駄なことをしてい

という思いがありました。「勉強をする」ということに対し、無益、有益という基準があつたのです。

話を元に戻せば、私が祖父に唐突な質問をしたのは、お年寄りには少々肌寒いような晩でした。当時八十を越えていた祖父にとっては、さぞ迷惑な電話だったと思います。しかし、そのようなことは微塵も感じさせない口調で、「はあ、できると思いますが」と返してくれたのは、今でも有難く思っています。私たちは、それから初めて夏空のような会話をし、受話器を置きました。私が中学生のころの話です。

その晩私は焦っていました。文通の返事を書いていたので。それも一度は止めてしまった文通の返事をです。

当時の私は、野球部の厳しい練習に加え貧血症がひどく、目覚めると湯船の中という有様で、宿題をするのもやっとでした。そのような私にとって、どちらからともなく始めた週一回の文通は、次第に煩わしいものになっていき、とうとう「止めたい」という手紙を出してしまつたのです。

しかし手紙を出した日、どうしても気になって仕方がない。手紙の内容も知らずに受け取った友達の写真。想像し得る表情の変化。祖父といひ彼女といひ、大切なものを知っている人は、どうして傷口から染み入るような笑顔をするのでしょうか。

私は思い直して、また手紙を出すことを決め、そして突然、どこかで記憶していた「憐憫」という言葉を使いたくなつたのです。

私はなぜ、そのような言葉にこだわつたのでしょうか。

今となつては、当時の心の曇りまでは説明できませんが、何しろ思春期です。女子が手紙の可愛い折り方に夢中になったり、男子が学生服の滑稽な裏ボタン集めに躍起になったりと、とにかく魔法のなかった時期です。にきび顔の私が、難しい漢字を使ったがっても、そういう年頃だったとしか言えません。

結局、祖父まで巻き込んで書きあげた手紙の返事は、多角形の奇怪な折り方の手紙で、「私にはよく分からなかったけど、手紙また続けることは分かった」と返ってきました。私の文面は、彼女の折り方以上に不可解な綴り方だったのかもしれない。

人の死は突然やってくるもので、今年の四月、祖父は他界しました。享年九十一歳。母から伝えられた時、私はすぐに先の話の思い出しました。

祖父は今頃何をしているでしょうか。天国で弁護士になるための勉強をしているのでしょうか。もしくは先に他界した祖母と、日向ぼっこでもしているかもしれません。

一方、文通の彼女は今でも、僕の知らないところで知らない人に、せっせと手紙を書いているような気がします。たとえどんな折り方をしても、手紙を破くことなくサラリと開けてくれる人を見つけるために。

そして私は、この広島で思い出の人たちを偲びながら、大切なものを見失わないように生きていきたいと願っています。